HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	江戸時代におけるツルの生息実態および人との関わり [全文の要約]
Author(s)	久井, 貴世
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12068号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/61688
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Atsuyo_Hisai_summary.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

平成 27 年度　博士論文

江戸時代における
ツルの生息実態および人との関わり

（要約）

久井　貴世

目次（部・章のみを抜粋）

序　章 ･･･ 1

第Ⅰ部　文献史料に記載される「鶴」の分類と認識･････････ 11

第 1 章　江戸時代の文献史料に記載されるツル類の同定 ･････････････････ 11
第 2 章　文献史料からみるツルとコウノトリの混同の実態 ･････････････ 71

第Ⅱ部　江戸時代におけるツルの分布と季節移動･････････････ 115

第 3 章　文献史料から復元するツルの分布 ･････････････････････････････ 115
第 4 章　江戸時代の日本に渡来したツルの季節移動 ･････････････････････ 183

第Ⅲ部　江戸時代におけるツルと人との関わり･････････････････ 221

第 5 章　江戸時代におけるツルの「保護」とその弊害 ･････････････････ 221
第 6 章　武家社会におけるツルの捕獲と贈答 ･････････････････････････ 247
第 7 章　江戸時代におけるツルの利用と流通 ･････････････････････････ 303

終　章 ･･･ 341

謝　辞 ･･･ 350

参考文献 ･･ 351

図版出典一覧 ･･ 382

付表 1　史料一覧･･ 387
付表 2　『享保・元文諸国産物帳集成』掲載資料一覧･･････････････････ 392
付表 3　『江戸後期諸国産物帳集成』掲載資料一覧･･････････････････ 395

要　約

研究背景

本稿で対象とするツルは世界に 15 種が生息し、そのうち日本では、これまでタンチョウ *Grus japonensis*、ナベヅル *G. monacha*、マナヅル *G. vipio*、クロヅル *G. grus*、カナダヅル *G. canadensis*、ソデグロヅル *G. leucogeranus*、アネハヅル *Anthropoides virgo* の 7 種が記録されている。日本では、北海道東部地域に周年タンチョウが生息し、大陸から渡来するツルは主に西日本で越冬している。いずれのツルも個体数は増加傾向にあるものの、一方で生息地が限られているため、一極集中化が問題となっている。

この問題を解決するため、現在では国や自治体、各種団体が連携して、集中するツルを各地に分散させるための取り組みが行われている。代表的な活動としては、鹿児島県出水平野に集中するナベヅルとマナヅルの分散を目的とする「ナベヅル・マナヅル越冬地分散化プロジェクト」、北海道東部地域に生息するタンチョウの分散を目的とする「タンチョウ生息地分散行動計画」、タンチョウの保護・増殖に取り組む岡山県が、県内での野生復帰を目指す「岡山県におけるタンチョウ将来構想」などが挙げられる。

例えば北海道のタンチョウの場合、越冬候補地の選定条件に歴史的越冬分布の考慮が含まれているとおり、ツルの生息地分散では、過去にツルが生息していたという経緯をもつ地域を分散先として選定することが望ましい。そのため、ツルの歴史的な生息実態を把握することが求められているが、ツルに関する歴史的な情報についてはほとんど明らかになっていないのが現状である。本稿では、ツルに関する歴史的な情報を収集し、現代の保護活動に資することを目標とする。

研究目的

本稿では、これまで主要な研究対象とされてこなかったツルの歴史的・文化的な観点から、江戸時代の日本におけるツルの分布と季節移動の解明、さらに当時のツルと人との関わりのあり方を復元することを目的とした。従来の研究では、江戸時代には日本全国に相当数のツルが渡来していたといわれているが、当時の分布の詳細や季節移動の実態についてはほとんど明らかではない。本稿では、このようなツルの生態的な情報に加え、ツルが生息地として利用した環境や、江戸時代の人間活動による影響などについても検討する。

さらに、ツルが多数生息した当時に日本各地で存在したツルと人との関わりは、ツルの渡来が途絶えることで消失し、現在までにその関わりの歴史自体がほとんど知られないものとなっている。江戸時代におけるツルと人との関わりは、地域の歴史として位置づけることができ、両者の関わりの復元は、失われた地域の歴史の復元と言い換えることができる。本稿では、両者の関わりのうち、これまでほとんど取り上げられてこなかったツルと人との軋轢などにも言及する。

調査は、江戸時代の文献史料を対象とし、主に各都道府県立図書館で史料の収集を行った。藩政史料のうち特に狩猟や贈答に関する記録、諸国産物帳・本草学・図譜・辞書・事典など江戸時代の動植物に関する史料、江戸時代の地誌や紀行、随筆、名所図会類、図像資料などを収集した。

各部の概要

本稿の内容は、第Ⅰ部（第 1 章～第 2 章）、第Ⅱ部（第 3 章～第 4 章）、第Ⅲ部（第 5 章～第 7 章）に分けられる。第Ⅰ部では、江戸時代の文献史料からツルをめぐる歴史を復元するための基礎となる作業として、史料上に文字として記載される「鶴」の同定を行った。第Ⅱ部では、江戸時代におけるツルの分布と季節移動の実態に注目し、文献史料による記述から、当時の様相の復元を試みた。第Ⅲ部では、江戸時代におけるツルと人との関わりについて検討した。

各章の概要

第 1 章：江戸時代の文献史料に記載されるツル類の同定

第 1 章では、文献史料を用いてツルの研究を行うにあたっての基礎的な作業として、史料上に記載される「鶴」の名称が現代のどの種に対応するのかを検討し、当時のツルの分類を把握することを試みた。江戸時代の史料上に記載されたツルの名称のうち、“鶴”、“丹頂”、“丹鳥”、“白鶴”、“真鶴”、“黒鶴”、“薄墨”、“霜降鶴”、“姉羽鶴”、“暹羅鶴”、“琉球鶴”、“朝鮮鶴”、“黄鶴”の 13 の名称について検討を行った。その結果、現代の種との対応をおおよそ明らかにできた名称が多い一方で、史料による分類の混乱や揺らぎ、地域差などがみられることを確認した。史料に記載された名称を現在の種名に比定するためには、当時の複雑な様相を留意したうえで、史料の性質を確認し、十分な整理を行う必要があることを指摘した。

第 2 章：文献史料からみるツルとコウノトリの混同の実態

第 2 章では、「鶴」という名称をめぐって混同されてきたといわれるツルとコウノトリについて、本当に混同されていたのかという問題意識から、誤認・混同の実態を明らかにすることを目的とした。江戸時代の史料において両種がどのように記述、認識されてきたのかを整理、検証し直した結果、ツルとコウノトリの名称の書き分け、形態や生態的な違い、利用方法の違いなどが明確に区別されていたことが確認できた。江戸時代にツルとコウノトリが混同されていたという単純な様子は確認できず、両種は別種として明確に区別されていたことが明らかになった。

これにより本稿では、江戸時代にはツルとコウノトリを別種として区別できていたという説に立脚し、史料に記載されている「鶴」は基本的にはツルを表わすと理解し、状況によってコウノトリを含めた検討を行うこととした。

第 3 章：文献史料から復元するツルの分布

第 3 章では、当時のツルの分布を復元することを目的とし、分布の詳細や広域性、各地に渡来した種について検討を行った。諸国産物帳を含めた地域産物誌史料、さらに幕府や諸藩の記録、地誌、紀行などの各種の史料を用いて、江戸時代におけるツルの分布の復元を試みた結果、ツルは沿岸の低地平野部や内陸の盆地などを主な生息地として、全国的に広く分布していたことが確認できた。また、渡来地と渡来数についての記述が確認できる同時期の史料が得られたことから、特に西日本を事例として、ツルの分布の広域性についても指摘した。当時の渡来地は複数個所に分散しており、それぞれの地域によって渡来する群れの規模も異なっていたことが明らかになった。

第 4 章：江戸時代の日本に渡来したツルの季節移動

第 4 章では、日本に渡来したツルの生息実態として、史料上の記録をもとに、江戸時代におけるツルの渡来時期、季節移動の経路と渡りに関するツルの行動について検討を行った。その結果、江戸時代のツルによる季節移動の様式については、二つの大きな系統に分類することができる可能性が示唆され、本稿ではこれを「北日本－東日本系統」と「朝鮮半島－西日本系統」と表現した。前者は、主に北海道から東北・北陸を経由し、関東あるいは中部地方まで至る渡りの系統である。後者は、現代の九州地方でもみられるように、主に朝鮮半島から対馬島や壱岐島を通り九州地方へ至る系統であるが、現代と異なるのは、移動の範囲が広く、九州だけでなく中国・四国・関西地方も範囲に含まれている点である。また、江戸時代の史料からは、ツルの渡りの際の行動を記したとみられる記述がいくつか確認できた。これらは総じて、現代のツルの行動から解釈することができ、渡りに関する行動の記述は、現代のツルの行動に齟齬をきたすものではなく、当時の人々がおおよそ正確な情報を把握していたことを指摘した。

第 5 章：江戸時代におけるツルの「保護」とその弊害

第 5 章では、江戸時代に行われていた鷹場管理の一環としてのツルの「保護」と、それによって引き起こされた弊害について、いくつかの事例を挙げて検討した。「保護」については、特に、紀州藩が伊勢国に設置した紀州藩伊勢国鷹場を中心として検討を行った。これらの事例から、江戸時代において、領主に独占されるツルは権威の象徴であり、ツルは当時の社会体制によって「保護」されてきたことを指摘した。江戸時代の主要な政治制度であった放鷹制度と、鳥類の贈答儀礼を維持するために行われた「保護」ではあるが、これが結果として、ツルの種の保全にも寄与していたと評価できる。ただし、江戸時代の「保護」では、野生のツルへの餌付けなど、人に馴れさせるような積極的な飼い付けが行われていた。そのため、人馴れしたツルによる農業被害なども発生していたことが示唆された。

第 6 章：武家社会におけるツルの捕獲と贈答

第 6 章では、江戸時代の武家社会におけるツルの捕獲と贈答について、当時定められていたツルの捕獲に関する諸制度や密猟の実態、ツルをめぐる贈答儀礼について検討を行った。本稿では、ツルは領主によって特権的に独占されるものであったが、その捕獲は無条件に規制されるものではなく、藩によっては、百姓や猟師、藩士にツルを「捕獲する」権利を与えていたことを確認した。さらに本章では、従来検討されてきた贈答品としてのツルの政治的・社会的な意味ではなく、贈答品として利用されるツルそのものに注目し、その実態について検討を行った。その結果、これまで贈答品の「鶴」として一括りにされてきたツルは、種や状態、用途によって利用する場面が異なっていたことが明らかになった。

第 7 章：江戸時代におけるツルの利用と流通

第 7 章では、飼い鳥、食用品などとしてのツルの利用という視点から、商品としてのツルのあり方について検討した。江戸時代のツルについては、従来は「禁制の鳥」としての側面ばかりが注目されてきたため、ツルが商品として売買されていた可能性についてはほとんど検討されてこなかった。しかし本稿では、京都や大坂、江戸などでツルが販売されていたことを指摘し、さらに佐渡島では、猟師が捕獲したツルが奉行所を通して競り売りされていた実態を明らかにした。商品として販売されるツルの産地については、佐渡島や蝦夷地、あるいは対馬藩を経由した朝鮮国のツルや、それ以外の外国産のツルである可能性が考えられた。

まとめ

本稿では、江戸時代のツルの生息実態、および人との関わりの復元をテーマに、文献史料を用いて当時のツルの実態を明らかにすることを目的とした。その結果、江戸時代のツルは、各地域に独立した個体群を有し、また複数の中継地の存在から、渡りの際の経路も多様であったことが明らかになった。これは、従来の先行研究において概説的に説明されてきた「全国各地に渡来していた」という事実の実態を示すものである。多数のツルが広域的に分布していた背景には、幕府や諸藩によって行われていた鷹場管理や、ツルに係る捕獲の諸制度、新田開発などの人為的な影響があったことが指摘できる。江戸時代の日本におけるツルの渡来は、自然と対立しない形での当時の開発や伝統的な農業、さらに社会的な仕組みによって維持されてきたといえる。

一方で、越冬地と繁殖地では、人為的な自然改変がもたらす影響が異なる可能性が推測でき、また、ツルの渡来の変化とその原因などについても十分な検討を行うことができなかった。したがって、最後に、ツルの種や地域、時代による差異などに留意し、さらなる情報を収集して検討を行うことを、今後の課題として提示した。